高校２年生
２．各論Ⅱ

「沖縄文化体験」ー伝統文化を体験する
（美術科＋家庭科の合科の試み）

原　　順　子・滝　口　恵　子

１．学習指導案

日　時　２月22日（火）午前10時40分～11時40分
場　所　家庭科教室
学年・生徒
第２学年　沖縄研究旅行「伝統文化」グループ40名
学習テーマ
「沖縄文化体験」ー伝統文化を体験する
（美術科＋家庭科の合科の試み）
目　標
・伝統文化について調べてきたことを作品にして表現する。
・「製作活動」という体験を通し、伝統文化への理解を深める。
テーマ設定の理由
（１）沖縄の伝統文化を採り上げる理由
伝統文化とは、脈々と続いている人間の営みの中で歴史的検証に耐え、残されてきたものである。それゆえ伝統文化に触れ、それを深める学習活動は、過去の遺産を現在・未来につなげる上で重要な意味を持つ。沖縄は本土とは異なった歴史・文化を持ち、その特殊性ゆえ生徒の興味・関心を引き出しやすい。研究旅行で現地を訪問できる機会もあるため、これを生かして「沖縄の伝統文化」を採り上げることにした。
（２）体験を重視する理由
総合学習の学び方の一つとして「作品にして表現する」手段を取り入れる。家庭科や美術科では体得してはじめて学んだことが身に付く。生活に根ざした技術や芸術を理解し、自分の中に取り入れようとするなら、技能の体験的習得は不可欠なものである。総合学習にもこの学び方は応用できると考える。
（３）美術科と家庭科が合科する理由
美術科と家庭科は製作活動がその中心をなす。他の教科にはない独自性を持つ。この二つの教科が合同で授業を行えば、生徒の「つくりたいもの」の要求に幅広く応えることができる。教師の側からしても、総合学習の場を借りて、美術科の中でも家庭科の中でも制約があってできない生徒の自由な表現活動を支援することができる。この総合学習では、教師は助言者である。
指導過程
11月16日～19日
沖縄研究旅行
11月20日　総合人間科
第13回　沖縄研究旅行の事後指導
12月18日（土）３・４限
第14回　フィールドワークの報告会
公開授業の趣旨説明・討論
１月29日
第15回　準備ー各班で製作物の決定
材料・用具・作り方の検討
２月５日
第16回　作品制作（試作検討）
２月19日
第17回　作品制作途中経過発表・鑑賞・資料制作
２月21日
前日準備
２月22日
第18回　作品の完成・発表（本時11／11）
本時の目標
これまでも６時間、試作・準備を進めてきたが、事前学習で得た知識より実際に作ってみると難しく、各グループ多くの課題が残った。本時はその課題を解決し、「沖縄文化体験」のまとめをする。

本時の学習活動

時間	学習内容	指導内容・留意点	評価の観点　※
導入 （5分）	・各班に残された課題を確認し、本時で仕上げ、発表することを知る。	・B紙、プリントにまとめたものを用意させ、本時は完成後発表しあうことを伝える。	・事前準備が整っているか。
展開 ◎つくる （30分）	・班毎に取り組んできた作品を完成する。 ①ゴーヤチャンプルー、イナムドゥチ（代表的な沖縄料理） ②ゴチンビン、ムーチー（粉食文化の行事食、おやつ） ③サーダーアンダギー（祝いごとに使う揚げ菓子） ④リサイクルガラス細工 ⑤藍のろうけつ染め ⑥シーサーの彩色	・課題を解決しながら、安全に作業が進められるように注意を促す。 （以下①～⑥の留意点） ①火力の調整、材料の水切り ②黒砂糖の溶け具合、タネのかたさ ③揚げ油の温度、ラードの配合 ④ガスバーナー、高温になったガラスの扱い ⑤ろう容器の扱い、染める時間 ⑥色彩の彩度（混色）	・試作時の失敗を生かして、作品を完成することができたか。 ・安全に気をつけて作業することができたか。 ・各自が自分の役割を理解して協力できたか。
◎発表とまとめ （20分）	・できた作品を互いに試食、鑑賞して発表する。自由に感想を述べ合い、つくる前と後では伝統文化に対する感じ方が変わったか等を話し合う。	・「つくる」ことによって「伝統文化」をより深く理解することができたか、考えさせる。 ・生徒同士の話し合いが活発に進むよう発問し、発言を促す。	・作品についての発表ができたか。 ・活発に感想を述べ合い、相互の評価ができたか。
後片づけ （5分）	・用具等の後片付けをする。	・ゴミの始末まで速やかにできるよう助言する。	・教室を元の状態に戻すことができたか。

※方法は机間巡視による観察

2. T．T．の方法

表：各班研究テーマと教科の関連

班	テーマ	F．W．先	作品	担当
A－1	伝統工芸 ～琉球ガラスと紅型～	那覇伝統工芸館	ガラス細工のアクセサリー	美術科
A－3	沖縄の食文化	松本料理学院・牧志公設・動物検疫所	ゴーヤチャンプルー イナムドゥチ	家庭科
B－1	美しきもの	パイナップルハウス 琉球村・共栄ガラス	藍のろうけつ染め	美術科
B－2	学ぶ沖縄 ～体験から沖縄の伝統を得る	ガラス工房燦 つるや食堂	チンビン・ムーチー(行事食)	家庭科
C－1	沖縄文化の特徴	城間紅型研究所 窯元新興陶房	シーサー	美術科
C－5	沖縄の特産	パイナップルハウス玉泉洞・牧志公設	パイナップルクッキー サーダーアンダギー	家庭科

沖縄文化体験は「食文化」と「伝統工芸」の2つに大別される。1つの班で両方をF．W．先に選び、研究してきたところもある。T．T．の形態は上表の通り、6グループを3グループずつ担当する分割型（班別学習型）。予算の執行等も別々に行った。3グループずつに分かれたが、特に教師が意図したわけではない。合科の理由が「生徒のつくりたいものの要求に幅広く応えるため」であるから、偏りが出ても仕方がないとは考えていた。藍のろうけつ染めはどちらとも分担出来ずに進んでいったが、最終的には美術科の手助けの方が多かった。このように分割して担当したのは、研究旅行から協議会までの授業が4回（8時間）だった

ため、現在ある設備でものを作るには小さなものを確実に形にした方がよいと考えたためである。(指導課程等は学習指導案参照)

3. 生徒の反応

この取り組みに対する生徒の反応は３つに大別される。

《タイプ１》

実際にものをつくるほうが調べて文章にまとめるより、わかりやすいし、楽しかったというタイプ

《タイプ２》

作品化は総合人間科らしくないとは思ったものの、つくってみたら深く学べたと実感したというタイプ。

《タイプ３》

つくるのは時間ばかりかかり、調べたりまとめたりすることができず残念だったというタイプ

以下、タイプ別に生徒の感想をあげる。

《タイプ１》

・沖縄でやってきた琉球ガラスと紅型を学校で実演することは不可能だったので、沖縄でやってきたことを無理矢理結びつけてガラス工芸をすることにした。ガラス工芸ははじめてやることだし苦戦したけど、堅いガラスが熱するだけで形が変わったかわいいアクセサリーになるので飽きなく楽しくできた。他の班の作品や料理も楽しそうにやっていたし、出来もよかったと思う。でも料理は作るものを決めれば発表するものが決まるけど、作品班はちょっと作るものとか具体的に決められなくてつらかった。でも日本史班とか数学班の授業形式の発表よりは、実演したりする美術・家庭科班でよかったと思う。こういう研究協議会があってよかった。楽しかった。（Ａ－１班）

・修学旅行から発表まで、一貫してとても楽しくできたと思っています。ガラス細工の醍醐味も味わうことができたし、料理は美味しいし。ガラス細工の方は初めうまくできなくて、かなり歯がゆい思いもしましたが、最後にはその技術も習得し、手に職をつけたかなととても満足です。不況に技術職は強いですからね。少し心残りなのは発表の日にガスバーナーの調子が悪く、ガス漏れしてしまい、遠くからわざわざ来ていただいた他校の先生を爆風で吹き飛ばしては悪いので、バーナーの使用を中止してしまったことです。そのためせかっくの技術をあまり御覧いただくことができませんでした。（Ａ－１班）

・研究旅行が終わってから、インターネットでの検索や本で調べたりとか普通のことをけっこう詳しく調べた。けど、やっぱり本当の意味で「協力」や「調べる」を取り組み出したのは、公開授業の準備ラスト３時間くらいです。みんなで作るものを決めて、作り方をインターネット・本などで調べ、最終的には由来とかも調べたし結構がんばりました。試作で作ったムーチー、チンビンは試作できてよかったと思うほど次回の本番で直すべきところ(ムーチー：もっと固めでよい。チンビン：焦げ目をつけるとおいしくなる。）を見つけることができたし、なによりみんなで作って楽しかった。公開授業の時は時間が足りなくて残んなきゃいけなかったし、量がいっぱいで結構大変だったけど試作より断然美味しかったし、来てくれた人たちにこのお菓子について教える時には調べた甲斐があったとうれしくなりました。沖縄のお菓子を作ることによって、沖縄の日常生活みたいなものがより近くなったと思いました。楽しかったし、勉強になったし、これからも沖縄の食生活について調べて自分で作っていろいろ食べてみたいと思いました。（Ｂ－２班）

・沖縄の伝統的なお菓子「サーダーアンダギー」と特産物のパイナップルを使ってクッキーを作りました。作り方とかは全くわからなかったので、本で調べてドーナツの作り方に沖縄の黒糖、油の代わりに「ラード」を使って作りました。粉が固まらなかったり分量がわからなかったりと苦労したけど、協力して何とかできました。なんだかんだで仲良く、楽しく、分担して出来ました。また作りたい。他の班の人たちもいろいろなものを工夫して作っていて、ちょっとした工芸品になっていた。ガラス細工もきれいでかわいかったし、「ゴーヤチャンプル」は初めて食べたけど「ゴーヤ」苦い…ちょっと苦手かも。「これが沖縄の料理か」と思いあれだけたくさんの種類を食べたのも感動した。こういう機会があってとてもよかったと思う。（Ｃ－５班）

《タイプ２》

・まず最初にプリント作成組と料理作成組に分かれて、それぞれのグループが仕事をきちっとできたのがよかった。私はプリント作成を担当したけど、プリント組内で担当がきちんと手早く分けられてよかった。プリント組の弱点は実体験ができないことで、自分の仕事が終わって当日料理に加わる時も、やはりそれまでの経験の差で、作り方を読んで言葉ではわかっていても具体的な行動がわからない。でも、そこらへんを料理組の指導によっ

て補えたし、当日（と前日少々）でも実体験できたことが貴重な経験であること実感できた。総合人間科スタートの年が、丁度中学入学の年であったことを幸運に思う。学校教育においてこの科目の理念は大変重要だと思う。しかし、必要とされるこの科目自体の歴史が浅く。そのカリキュラムは5年経過した今でさえ生徒の目からみてまだまだ未熟なものに感じる。もしかしたら、カリキュラム自体は確立しているのだが、その歴史の浅さ故に理解の浸透に欠けているのかもしれない。つまり、教師とそれに続く教師が、この授業の理解に欠け、最大限に生かし切れていないのかもしれない。だから、総合人間科に異論を唱える人がいたとしても、それを理由にストップをかけてもらいたくない。まずは教育者から、深く理解をすることを進めていって欲しい。（A－3班）

・研究協議会が近づき、何か形あるものを作らなくてはいけないということで、沖縄を思い出し、再始動し始めた。うちの班は料理について調べていたので、料理を作ることになり、なんだかんだでとりあえず作った。プリントも作った。今思うと、普通の調理実習とあまり変わらないような気がした。だけども沖縄を深く理解することはできたと思う。

矛盾しているようだがつまりこのようなことがいいたい。はじめに沖縄食について僕らは学んだ。その後で料理を作った。原点は学ぶことにあるようだ。それから形にしてみることで真の理解へつながる。「作る」ことが理解じゃなく、「学んだことを形にする。」ことが理解につながる。（A－3班）

・沖縄で体験したろうけつ染め（藍染め）を再現しようと思ったが、実際琉球村ではそめているところは見ることができなかったので、染め方がよく分からず、先生に頼ってしまうところが多くなってしまった。自分たちで染めてみると、天然の藍と化学染料の味わいの違いがとてもよくわかった。藍の原液は毎日様子を見ないといけないらしく思っていたよりも大変で、やはり芸術品を創り上げるのはいろいろな努力が必要だとおもった。藍染めを通して芸術の奥深さが体験できた。他の班の発表はとても学ぶものが多かった。料理はとても甘いもの、とても苦いもの、と沖縄の味ははっきりしていると思った。気候が暖かいのと何か関係があるのだろうか…。シーサーは沖縄でも1つ1つ顔が違ったが、みんなの作品は1人1人の個性が表現されていて沖縄のものと似ているようで微妙に違い、とてもおもしろかった。（B－1班）

《タイプ3》

・どちらかと言えば、実は私は戦争関係の事柄の研究グループに入りたかった。特に国語＋保健の研究テーマ「戦争と心の傷」等は大変興味があった。しかし美術＋家庭科のシーサー作りと紅型の研究も（特にシーサーの製作が）非常に疲れはしたがまあ楽しかった。しかし、肝心の協議会の内容がシーサーをこすって沖縄料理を食べて片づけて終わりだったというのは、嬉しかったと同時に意外だった。（C－1班）

・今回の総合人間科の研究活動を通しての反省は最初のテーマ決めがはっきりしていなかったことです。グループ活動のため、自分のやりたいことも少し抑えなければ進んでいかないのは確かですが、それにしてもグループの中で方針をはっきりさせておくべきだったと思います。研究集録をグループで作らなくてよかったので、研究のはっきりしたまとめをすることがなく、方針の不明確なことはそれほど困ることはありませんでした。しかし方針がはっきりしていたらずっと多くのことが学べたと思います。もう1つの反省としては先生とのコミュニケーションがとれなかったことです。私たちは自分たちの力でやるしかないと思っていました。先生にどの程度頼ることができるのかわかりませんでした。自分たちは何を作るように求められているのかわかりませんでした。個人が調べたいことをグループでまとめ、研究授業としてまとめていく際に「調べたい」という意志まで削っていってしまったと思います。まずは研究協議会が終わってほっとしていますが、思い起こすと反省ばかりです。（C－1班）

4. 結果と考察

①　目標「伝統文化について調べてきたことを作品にして表現する」ことはできたか。

「食文化」を調べた班はF．W．を生かし、作るものが決めやすかった。作り方や歴史も文献に多かった。ただ、材料の入手が難しく沖縄観光協会の店まで買いに行かないと手に入らないものがあった。準備の8時間は試行錯誤に要する時間として適当だった。「伝統工芸」を選んだところは調べたことをそのまま形にすることは不可能だった。沖縄ガラスを調べたところはバーナーガラス細工、シーサーを調べてきたところは焼かなくて良い粘土で再現するという学校にあるものでつくる工夫が必要だった。また、沖縄のF．W．で伝統工芸の専門家に話をして

いただいたところほど、形にするには難しすぎ、歴史から調べるには時間がない、と消化不良を起こさせてしまった。話を聞いて感動したことを、より調べたい、まとめたいという欲求に対し、（これまでの総合人間科は満たしていたが）今回の取り組みでは充分満たすことができなかった。そのため、「なぜつくらなければならないのか。」という《タイプ3》の生徒の疑問に答えきれなかった。これが美術科や家庭科の授業ならば、技能の習得という目標のもとに動機づけができるが、総合人間科には技能の習得は必要がない。「文化の継承」について事前にもっとよく考えさせた上で体験させれば動機づけがよりしっかりとでき、生徒の疑問に答えることができた。

② 目標「「製作活動」という体験を通し、伝統文化への理解を深める。」ことはできたか。

この沖縄文化体験を選んだ生徒がもともと「ものをつくる」という具体的なことに興味があるから集まった集団だったこともあり、沖縄の文化が少しわかった、という感想が多く一定の成果はあった。しかし、他の班をみてすごいと思った、つくることが楽しかった、協力してできてよかった、だから、伝統文化が理解できた、という≪タイプ1≫が多く、自分たちが製作したものがなぜ伝統文化として残っているのかまでは踏み込めなかった。その中で唯一、協議会の話し合いの中で出たやりとりは印象的だった。≪タイプ3≫の生徒が、「つくっている時はただ失敗しないように一生懸命つくっているから伝統文化を理解しようという余裕などない。」と発言した。それに対して≪タイプ2≫の生徒が「何でもつくっているときはそんなもんで目の前にあるものに集中し、その中のどこかに価値があり、例えば美しいとか、選ばれて残ったものが文化になって伝統になっていくのではないか。」というやりとりだった。この発言が出たことで目標達成の手応えを感じた。全員が理解を深めるまではいかなくとも、作品を前に考えるきっかけとなった。この話題で話し合いを続けたかったが時間がなくて充分意見を聞くことができず残念だった。話し合いの時間は指導案上で20分。実際は後片づけの時間を授業後に回して20分確保したが足りなかった。公開授業で作るところも討論しているところも公開しようとしたため、中途半端になってしまった。授業を120分で組み立てるか、公開授業は討論を中心に進めてもよかった。どの場面を公開授業にするかというのは取り組みの中では些末なことであるが、一考の必要があった。

③ グループ研究の良い点、悪い点は残った。

グループ研究の形態をとると、グループ内で意見の食い違いなどから、取り組み方に個人差がでやすい。今回はそれが少なかった。具体的なものを作るという過程では分担が容易で責任の所在がはっきりし、班員同士でまたは他の班を互いに高く評価しあい、学び合うことができた。これは成果である。しかし、感想にあったように個人の希望や方針が必ずしもかなえられるものでないグループ研究の弱点もまだ残った。このことを個人で克服していくことも大切な学び合いであるから、この弱点はあったほうがよいと考える。

5. まとめ

美術科と総合人間科、家庭科と総合人間科の合科にはなっていたが、美術科と家庭科の内容の合科はできなかった。協議会のテーマ「総合学習の成果を教科に生かす」というより、「美術・家庭科の成果を総合学習に生かす」になった。細かい理由をいえば美術科が選択科目であることや、協力して大きな作品をつくる設備・時間・予算がないことがあげられる。しかし、総合学習は生徒の持っているあらゆる能力を総合して、問題を解決していく教科であるから、既製の教科同士の合科は総合学習にはさほど必要がないと考える。総合人間科も美術科や家庭科と同じ独立した1つの教科である。美術科や家庭科の立場から言えば、生徒が総合的に課題を解決し、理解をしていく過程で無意識にでも教科で培った能力を発揮してくれることを望む。そのために教科指導に力を入れていきたい。